

私見創見 Tuesday

33歳で結婚した。父親から結婚式のスピーチで「いつかはさうと結婚できないものだから思っていた」と言われ、会場から共感の爆笑が沸き起こったほどの私だが、結婚して

9年、なんとか暮らしている。家内は津軽の人。親族にも友人にも津軽の人はいなかった。結婚して初めて津軽を知ることになった。

脳卒中になんかたを南部では「あたる」というが、津軽では「ちゅちゅ」といって、調子よく「ちゅちゅ」神様」のてを指しているらしい(語釈あり)。いやいや、奥が深い。思い返してみれば、八戸に生まれてからというものは、高校までの間に八戸を出たのは修学旅行だけ。津軽のことを知る機会といえば、18時台の県内ニュースと天気予報だけ。大隅「三鷹」西目屋「」。南部には無い独特な響きの地名を聞きながら、どんなところだろうとボヤキ考える程度の関わり方だった。しかし今なら確信できる。南部も津軽も、個性ある素晴らしい土地だ。まったくの別物だ。それなのになぜ、観光では「青森県」とひとくくりにしてしまっているんだろう。いつそのこと、南部と津軽

魅力を伝える工夫

観光は「遊び」をつくるもの

でケンカでもすれば良いと思ろ。たゞは古いが、アニメ化もされた大人気グルメ漫画『美味しんぼ』では、2つの新聞社が「究極のメニュー」と「至高のメニュー」で対決するところが物語のエンジンだった。これにあやかって、テ

りー東北さんと津軽の新聞社さんとでグルメ対決でもしてほしいと思う。例えば山のきのこ・ナラタケは、南部では「カックイ」と呼ぶが、津軽では「サモタシ」だ。どちらでも愛されているのに、名前も食べ方も違

う。双方に発見があるし、競い合うほどに料理はうまくなるだろう。良いイメージだ。そして何より、ケンカは人々の目を集めやすい。例えば町を歩いていて、近からケンカの音がしてきたら、注目しない人はいない。映画やドラマ、小説やアニメ

で、ケンカが登場しないものがあるだろうか。つまり、「ケンカ」は、人々の目を集める企画を考える時に頻りに用いられる、極めて優秀な演出手段だ。つまり、ケンカや「競い合うこと」に興味を持ってしまおうよ。フランスの思想家カイヨワ

は遊びを4要素に分類した。・アレン(競争) ・アレヤ(偶然) ・ミタリ(権威) ・インクス(目まじ)

あつためて念を押すまでもなく、観光とは遊びだ。決して何かを手ぶためにすることでも、役立たせるためにすることでもない。観光で得られる体験は結果的に学びになるし役にも立つけれど、あくまで遊びとして楽しいものでなければ、観光は成立しない。観光とは遊びをつくるもの。そんな視点から現状の観光を眺めてみると、ヒントが得られるかもしれないと思う。



玉樹真一郎

八戸学院大 地域経営学部特任教授

たまき・しんいちろう 八戸市生まれ。1977年八戸市生まれ。八戸高、東京工業大、北陸先端科学技術大学院大を卒業。2001年、任天堂に就職後、プランナーとしてゲーム機「Wi」を企画担当。退社後にサウンディング作業を営む。『ついでに』の体験のつくりかたなど。

サイコロのように、体験に偶然の要素を入れれば楽しくなるという。ミタリ(権威)は、おまじことのように何かのフリをする業しさ。インクス(目まじ)は、すべり台やジェットコースターのように五感を激しく揺さぶる業しさ。これにアレン(競争)を加えた4つで遊びを分析したのがカイヨワの功績だ。ちなみだ、コロナ禍で演出ができないことは県内旅行のチャンスだ。私は下北へのさやかな旅を計画している。ナラタケは、下北では「ポリポリ」と呼ぶらしい。ああ未知の土地、下北！まだ知らぬ青森の面白さがあるに違いない。地図を見れば、下北半島はサカサカリの形。ケンカも実に強かった。